『アジア女性基金と慰安婦問題』への編集者のコメント

2016 年 12 月 6 日@東京大学

明石書店　関正則

１．済州島 4・3 事件と慰安婦問題

私が朝鮮・韓国問題の本を作るようになったのは、2000 年に済州島 4・3 事件の運動に関わるようになってからです。4・3 事件については、韓国において真相究明・名誉回復・記念事業などが法制化され、大統領が現地に赴き公式謝罪も行われました。私は、これを韓国人と在日コリアンの人々が共同で成し遂げた韓国民主化の偉大な成果であり、東アジアの現代史における歴史精算の「範例」だと考えてきました。日本における慰安婦問題は、日本人としてのその「範例」への応答でありたいと思ってきました。

２．「回想と検証」の意味

今回のご本の最初の段階（2014 年）では、アジア女性基金をめぐる「回想録」の面と問題解決への「提言」としての二つの側面がありました。「提言」は緊急性がありましたので、コンパクトな新書の形で出版しました（2015 年 5 月）。他方、「回想録」といっても、アジア女性基金の呼びかけ人と専務理事を務められ、しかも稀有な歴史家である和田先生の回想録が、大変重要な歴史的資料となることは間違いありません。しかし同時に、アジア女性基金については厳しい対立もありますので、批判者との対話を可能にするために「検証」の側面を強めていただくよう、編集上のお願いをいたしました。

３．「合意」に魂を込める

編集の過程で、2015 年末に日韓外相間の「合意」が発表されたことは、この本の意義に重要な変化を加えました。「検証」が「回想」（過去）へだけでなく、「合意」（現在）に向けた意味を持つことになったからです。「合意」が、アジア女性基金だけでなく、慰安婦問題の長い道のり一つの「帰結」であるとするならば、それをどう評価し、そこに何か欠け何を加えるべきかを検証し、再び提言するという実践的な性格を強くもつことになりました。本書の編集においても、「合意」に「魂を入れ」ようとする願いと努力が、校了間際の 10 月のぎりぎりまでなされました。しかし、その直後から韓国は朴槿恵退陣をめぐる大きな混乱の渦中に入り、それがどのような結果となるのか、今も定かではありません。